

第3回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社

特別協賛



ジャパンワクチン株式会社

日本医師会

赤ひげ大賞

目 次

- 3 第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 5 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 熊坂 隆光
- 6 協賛社挨拶 ジャパンワクチン株式会社 代表取締役会長 長野 明
- 7 第3回 表彰式

受賞者紹介

- 13 岩田 千尋 (岩手県 大槌病院)
- 18 西嶋 公子 (東京都 西嶋医院)
- 23 鬼頭 秀樹 (徳島県 上那賀病院)
- 28 二ノ坂 保喜 (福岡県 にのさかクリニック)
- 33 古川 誠二 (鹿児島県 パナウル診療所)
- 38 選考講評
- 39 第4回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要



第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設されました。各都道府県医師会から1名の候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名が決定しました。

- 主 催** 日本医師会、産経新聞社
- 後 援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 特別協賛** ジャパンワクチン株式会社
- 対 象 者** 日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師。
ただし、現職の都道府県医師会役員は除く。原則として、70歳未満の方を優先。
- 推薦方法** 各都道府県医師会会長が1名を推薦
- 推薦基準**
- 日常の診療に加えて、「予防医療活動・学校保健活動・公衆衛生活動等を通じた地域住民の健康管理」「医療環境整備や社会活動」「障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動」といった取り組みに尽力し、医療を通じてまちづくりの一翼を担っている医師。
 - その他、医師不足・医師偏在等、医療資源の乏しい地域や、インフラ整備が進んでいない地域など、地方あるいは都市ならではの問題を抱えた厳しい医療環境の中で住民を支えている医師。
- 選考委員**
- 羽毛田 信吾 (昭和館館長、宮内庁参与)
向井 千秋 (宇宙航空研究開発機構 宇宙医学研究センター長)
山田 邦子 (タレント)
小林 光恵 (作家)
二川 一男 (厚生労働省医政局長)
外山 衆司 (産経新聞社専務取締役)
河合 雅司 (産経新聞社論説委員) 他日医役員等



日本医師会 会長
横倉 義武

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている「現代の赤ひげ先生」にスポットを当て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」という名称ですが、その由来は山本周五郎^{やまもとしゅうごろう}の時代小説「赤ひげ診療譚」^{しんりょうたん}にあります。「赤ひげ先生」と言えば、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

医師には、患者さんを前にした時、その方に寄り添い、同じ目線で治療に当たることが求められています。そのためには、私どもが行っている医療というものが、医療提供者である医師を始めとするさまざまな医療関係者の方と、医療をお受けになる患者さんとの信頼関係に基づいた協働作業でなければなりません。

今回、受賞された5名の先生方は、いずれも各地域において、献身的な医療活動を通じて患者さんの治療に携わっている方々であり、まさに「現代の赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしいご活躍をされていらっしゃる方々ばかりです。

2025年には、日本の経済成長を牽引してこられた団塊世代の方々が後期高齢者となり、高齢化のピークを迎えます。それまでに残された時間はわずかに10年しかありませんが、その間に、かかりつけ医を中心とした医療と介護が連携する地域ネットワークづくりを進めていくことが、われわれに課せられた使命であると考えています。

また、かかりつけ医には、今後、疾病の早期発見・早期治療、生活習慣の改善による疾病予防ばかりでなく、高齢者の方々が生活を営むための機能の維持等、健康寿命を延ばしていくことも求められており、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している赤ひげ先生の役割がますます重要になってきます。

日本医師会としまして、「国民の生命と健康を守る専門家集団」として、「必要とする医療が過不足なく受けられる社会づくり」を目指し、さまざまな事業活動や国への働き掛けを行って参る所存でありますが、本日お集まりの皆様方にも、ぜひ、全国の赤ひげ先生が今後も活躍できるよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。



産経新聞社 代表取締役社長

熊坂 隆光

受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、本日は誠におめでとうございます。

「日本医師会赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社が共同で、地域に密着して人々の健康を支えている医師の方々の功績をたたえるとともに、広く国民の皆様にも地域医療の大切さを改めてご理解いただくことを目的に創設しました。

産経新聞でも紹介させていただきましたが、受賞された皆様は、それぞれの地域社会の中でなくてはならない存在として多くの信頼を集め、地域住民の健康を支えてこられました。医療の根幹をなす地域医療の充実こそ、急速に高齢化が進む日本にとって必要不可欠なものであると考えています。

昨今、我が国の成長戦略として「医療分野」がよく取り上げられております。世界を圧倒する日本の医療技術、それは制度だけではなく本日の受賞者の皆様のような、誰もが安心して暮らせる「かかりつけ医」の方々が存在して初めて成り立つものだと思っております。

今回の受賞者の皆様は、まさしく「現代の赤ひげ」と言うべき地域に根差した活動に従事されております。その献身的な日々の活動は、まさに「日本の力」と言えるものであります。東日本大震災の際に懸命に医療活動にあられた医師、長年に渡って離島医療に従事してこられた医師、都市部で住民の為に在宅ケアに力を注いでこられた医師など、いずれもこれからの若い医師が目標とすべき先生方が受賞されております。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、ひいては国民の健康増進の一助となるべく、グループを挙げてこれまで以上に医療報道に邁進^{まいしん}していく所存であります。今後とも、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。改めて受賞された皆様にお祝いを申し上げます。



ジャパンワクチン株式会社 代表取締役会長

長野 明

栄えある第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞されました岩田千尋先生、西嶋公子先生、鬼頭秀樹先生、二ノ坂保喜先生、古川誠二先生誠におめでとうございます。

そして、赤ひげ先生を支えてこられたご家族、スタッフ、関係者の皆様にご心よりお祝い申し上げます。

受賞された皆様は、大震災後も被災住民とともに歩む医療、住民と協働した在宅医療体制の構築、僻地医療への献身的なお取り組み、心豊かな触れ合いある在宅ホスピスづくりそして離島での地域住民への献身的なお取り組みをされてこられました。

「かかりつけ医」とは、診療を核としつつも地域住民の生活、心の支えといった存在であることを確信いたしました。皆様が地域住民の苦楽を我が事として接し、地域住民の健康を第一義に考えられた診療活動を献身的に展開されていらっしゃることに、感銘を覚えますとともに、心より敬意を表するものでございます。

私どもジャパンワクチンは、「力をあわせて、未来を守る」をコーポレートスローガンといたしております。日本全国、どちらの地域におかれましても「かかりつけ医」の先生を中心に、医療関係者の皆様が力をあわせ、地域住民が「安心」を感じる地域社会の実現に尽力されることに、ジャパンワクチンはお力添えをしてみたいと考え、特別協賛させていただいております。

前回「赤ひげ大賞」を受賞された横須賀の野村良彦先生のコメントが、今年8月の産経新聞朝刊に掲載されておりました。

野村先生は、「家族を看取ったご遺族が外来受診されたときにお話しを聞き、ご遺族の心の痛みを癒せるのも、やはりかかりつけ医だからだと、赤ひげ大賞を受賞して改めて思うようになった。」と話されておられました。この記事を拝見しジャパンワクチンが会社挙げてご協力出来て本当に良かった、と感じているところでございます。

此の度作製された「日本医師会 赤ひげ大賞」のポスターが、全国の医療機関に来院された患者さんやご家族の皆さんの目にとまり、「かかりつけ医」を中心とした関係者の皆様のご活躍ぶりが国民に広く浸透する機会になることを願っております。

最後となりますが、赤ひげ大賞受賞者の皆様、そして関係者の皆様の今後益々のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

第3回 表彰式



地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が平成26年10月31日、東京・内幸町の帝国ホテルで開かれた。

日本医師会の横倉義武会長、産経新聞社の熊坂隆光社長から受賞者5人に表彰状と記念品を贈呈。東日本大震災被災地から初の受賞となった岩手県の岩田千尋医師は「今後も地域医療を担う」と力強く語った。

表彰式後に行われたレセプションでは、特別協賛であるジャパンワクチン・長野明会長が受賞者を祝福。

来賓の安倍晋三首相は「地域の課題に向き合いながら、健康維持をすることが大事。健康な国・日本を作るため頑張っていたらいい」と祝辞。塩崎恭久厚生労働大臣も「住みやすい生きがいのある地域にするために頑張してほしい」と祝福。選考委員を務めた昭和館館長の羽毛田信吾宮内庁参与、タレントの山田邦子さんも駆けつけ、5人の医師をたたえた。

表彰式・レセプション



東日本大震災被災地から初の受賞となった岩田医師



選考経過を報告する石川日本医師会常任理事



長野明ジャパンワクチン会長、村木厚子厚生労働事務次官、横倉日本医師会会長、熊坂産経新聞社社長と受賞者。後方は選考委員



横倉日本医師会会長、熊坂産経新聞社社長が、各受賞者を表彰



レセプションで挨拶する安倍晋三首相



レセプションで安倍首相、横倉日本医師会会長と5名の受賞者

内閣総理大臣
安倍 晋三



「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆様、本当におめでとうございます。離島、あるいは被災地、新興住宅など、さまざまな地域の方々に寄り添いながら、地域の健康を守っている受賞者の皆様に、改めてお祝いを申し上げます。安倍政権におきましても、かかりつけ医という大切な仕組みをしっかりと広く、国民の健康維持の仕組みとして定着させていきたいと思っています。大病院では、なかなか手が届かない、それぞれの地域の人々が持っているさまざまな課題、さまざまな問題に寄り添い向き合いながら健康維持をしていくことが、とても大切なのだろと思います。特に、被災地や離島においては、大都市と全く異なる困難があるわけですので、地域の方々は皆様のような医師を本当に頼りにしているのだと思います。そしてまた、高齢化が進んでいます。黒澤明監督の映画「赤ひげ」に情熱的な若い医師役として出演された加山雄三さんも77歳になられたそうです。みんなが、加山さんみたいに元気であればいいのですが、なかなかそうはいかないわけです。長いおつきあいのできる医師の存在は、体だけではなく、精神的な面でも、とても大切なのではないのでしょうか。日本医師会と産経新聞社によって「赤ひげ大賞」がもうけられて、こうした医師の努力をきっちり評価するのは、素晴らしいことです。健康な国、日本を作っていくうえにおいて、われわれも一生懸命がんばっていきたいと思います。受賞された皆様におかれましては、ますます地域の方々のためにがんばっていただきたいと思っています。

厚生労働大臣
塩崎 恭久



第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。
はじめに、本日栄えある表彰を受けられた岩田様、西嶋様、鬼頭様、二ノ坂様、古川様の5名の皆様に対し、心からお祝いを申し上げます。

本日受賞の皆様は、地域医療の現場において、住民が安心して生活を送れるよう、地域に寄り添った活動に、日夜ご貢献いただいているところでございます。東日本大震災の発生直後からの医療活動、新興住宅地での在宅医療の定着化、僻地^{へきち}における外科医療の提供、在宅ホスピスの実践とその普及、持続可能性を追求した離島医療など、それぞれの地域で住民の健康を守るための、地道で献身的、継続的な皆様の活動に、改めて深く敬意を表する次第です。

さて、日本の医療は、医師不足や、厳しい勤務環境など様々な課題を抱えております。超高齢社会に対応するための医療提供体制の改革や、地域包括ケアシステムを推進するため、医療介護総合確保推進法が本年6月に成立しました。今後、各地域において、地域のニーズを踏まえた医療・介護サービス提供体制の改革を進めていきます。

その実現のためには、全国の「赤ひげ」として、地域医療の第一線で活躍される皆様のお力添えが不可欠であり、体制構築へのご理解を賜れますと幸いです。

厚生労働省としては、本日の受賞者の皆様をはじめとする地域でご活躍の方々が、その意欲・能力を存分に発揮していただけるような施策の推進や環境整備に努めてまいります。地域医療の発展のため、今後ご尽力を賜りますよう、お願い申し上げます。

終わりに、本事業を支えてこられた日本医師会、産経新聞社をはじめとする関係者の方々に敬意を表するとともに、「日本医師会 赤ひげ大賞」の一層の発展と本日お集まりの皆様のますますのご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

岩手県医師会会長
石川 育成



栄えある「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された先生方、誠におめでとうございます。5人の先生方に心より敬意を表します。また、選考委員の皆様にもお礼を申し上げます。

「赤ひげ大賞」は、地域の医療現場で長年にわたり地域住民の健康を支えた医師を顕彰するものです。受賞者の一人である岩田千尋医師が働く岩手県大槌町は、リアス式の三陸海岸の真ん中にある人口1万5千人の小さな町です。岩田医師は、ここで地域医療を守り、住民からも頼りにされてきました。ところが、平成23年3月11日、東日本大震災が発生し、町は津波によって壊滅的な被害を受けました。当時、岩田医師が院長を務めていた病院は3階建てでしたが、その2階まで津波が押し寄せました。岩田医師は、電気も通らない大変な状況の中で、患者を守り3階に避難させて、その後、病院のスタッフと共に避難所へ移り救護活動を続け、1ヵ月半後には仮設診療所を開設致しました。われわれ岩手県民は、岩田医師の活動に対して大きな誇りをもって推薦しました。

実は岩田医師は、平成24年3月で定年を迎えられたのですが、岩手県の要望と地域住民の希望が強く、現在も、岩手県立大槌病院の院長を務め、地域住民の声に耳を傾けながら、新しい病院の設計などにもたずさわるなど、日々、仕事に邁進^{まいしん}しています。このほかの受賞者の皆様方も立派な先生ばかりで、医師の使命感から、大変な苦勞を乗り越えてこられた、とうかがっています。こうした尽力に対して衷心より敬意を表します。

受賞された先生方におかれましては、今後ますますのご活躍とご健勝をお祈りしております。

第3回 「日本医師会 赤ひげ大賞」受賞者一覧



岩田 千尋

岩手県
大槌病院



西嶋 公子

東京都
西嶋医院



鬼頭 秀樹

徳島県
上那賀病院



二ノ坂 保喜

福岡県
にのさかクリニック



古川 誠二

鹿児島県
パナウル診療所

被災地の最前線で戦う

岩田 千尋

(岩手県)

いわた・ちひろ 岩手県立大槌病院院長。昭和22年、埼玉県生まれ。67歳。岩手医科大医学部卒。同大大学院医学研究科修了後、昭和51年から大槌病院に勤務し、平成5年から院長に就任。東日本大震災後の地域医療の復興に尽力している。



(小野淳一撮影)

町を流れる大槌川。山々の木々が赤く染まる晩秋、この川を次々とサケが上っていく。江戸時代初期、大槌城主の大槌孫八郎政貞が江戸へ出荷するためにサケの塩漬けを考案し、新巻きサケ発祥の地として知られる岩手県大槌町。この川のすぐ脇にあった県立大槌病院は東日本大震災の津波が直撃し、現在は解体されている。121床あった地域の医療拠点の面影は、ほとんど残っていない。

そこから川を約1^{キロ}上流にさかのぼると、プレハブの建物が見えてくる。現在の大槌病院だ。決して広いとはいえない待合室は地域住民らであふれかえる。奥の診察室からやさしい声が聞こえてくる。

「お加減はどうだい」

「おかげさまで」

「いくつになったんだっけ。えっ94歳。たいしたもんだねえ。お大事に」

「先生もお大事に」

こんな軽妙なやりとりが交わされる。

「陸の孤島」と呼ばれた大槌町で38年。千年に1度といわれる未曾有の震災にも負けず、岩田千尋院長は地域医療の現場に立ち続ける。

間一髪で津波から避難

気がつけば、ここで40年近くたっていた。

埼玉県秩父市出身、祖父から続く医師の家系だ。兄が岩手医科大で学んだこともあり、自身も同じ大学で医師のスタートラインに立った。産科医だった実家は兄が継ぎ、次男の気軽さがあった。「気がついたらこれだけの時間がたっていたね」と笑う。

昭和51年に後輩と2人で赴任した。若い医師はほかにいなかった。

ただ、決して医療後進地域ではなかった。日本中が好景気にわいた昭和50年代、人口も多く、さまざまな経験が積めた。当時の病院長の協力もあ



患者との軽妙な掛け合いで、診察室に笑い声が響く



地域医療を支え続けた大ベテランにスタッフからも厚い信頼を寄せる



「お加減はどうですか」。岩田医師の穏やかな声で患者の表情もやわらく



現在の診療所には津波でも流失しなかった表札が掲げられている



以前の病院は解体され、かつての面影は残っていない



被災地では復興工事が進むが、工期を終えるにはまだ長い年月がかかる

り、最先端の超音波治療など、高度な医療もできた。隣には、製鉄で栄える釜石市。釜石と連携した医療圏で、医師らの交流も活発だった。住民も、若い自分たちに「これ食べろ」って魚を持ってきてくれた。結婚してすぐに赴任したこともあって、5年もすると子供もでき、町に愛着がわいてきた。

そんな第2の故郷を震災が襲った。平成23年3月11日は人事発表の日だった。午後1時半から始まった伝達式は思ったよりも早く終わった。午後の回診に備えて、院長室で患者のカルテに目を通していたときだった。激しい揺れ、停電し非常用電源に切り替わる。経験したこともない揺れだった。約10分後に大津波警報が出た。入院患者は53人。付近の住民も約30人が病院に逃げ込んできた。70人の職員全員で3階まで誘導し、重要な書類や医療機器も避難させた。間一髪、津波は2階の天井で止まった。

自力で動くことができない入院患者は約30人。いくら待てども搬送用のヘリコプターは来ない。

「周りの状況が分からないからみんな『なんで来ないんだろう』となっていた。あれだけの広範囲の災害とって思っていなかった」と振り返る。

動けない患者を車いすに乗せ、職員総出で避難所まで搬送した。だが、避難所も人であふれていた。

いち早く医療体制を立て直さなければならなかった。ここで30年以上培ってきた人脈が生きた。つきあいのある薬局の社長が患者を受け入れてくれる介護施設を探してきてくれた。3月下旬には、地域の顔役が「公民館で診療できるように掛け合う」と申し出てくれた。住民らが掃除してくれて、そこが仮設の診療所になり、約1カ月で内科の診療を再開した。その後、約3カ月で、現在の仮設診療所に移った。津波で病院を失い、苦しいはずの地域の開業医たちも、全国から応援に駆けつけた医師団と共に診察にあたった。これまで培ってきた地域のネットワークのなせる業だった。

「長い伝統の中で開業医も勤務医も連携する



笑顔あふれるスタッフの中心にはいつも岩田医師がいる

下地ができていたんでしょね」と岩田医師。

海のすぐそばにあった公舎は流され、自身は住む所も着る物も失った。当日、妻は盛岡市にいる孫のもとを訪ねていて無事だった。病院の様子が報道されたこともあり、家族は岩田医師の安否を把握できていた。しかし、当の岩田医師だけは妻が何時ごろ帰宅するか聞いていなかったため、所在は分からないまま、連絡が途絶えてしまっていた。安否が分かったのは数日後だったが、不安を抱えながらも自分のことは後回しで奮闘した。

近年は医師不足が進み、約10人いた常勤医は3人まで減少していた。病床数を半減しながら、隣接する釜石市と連携し、地域医療を支えてきた。

「自分が若いころのような病院とは違う、機能分化が必要でしょう」と、これからの医療のあり方を考える。

「高齢者が大半を占める大槌病院の大きな役割は、患者らをどう看取っていくのかということになっていく。救急救命は釜石や盛岡などに任せ、ここでは慢性期の患者をおだやかに治療する。大槌病院は開業医と救急の中間として、地域医療の拠点となる」と将来像を語る。

生涯現役を貫きたい

新しい大槌病院は平成28年度に開院する計画だ。復興の進み具合や人口減少に拍車がかかる現状を考えると、前途は多難だ。「震災のあと、いろいろな人に出会って、人生が変わるくらい勉強



被災地の医療拠点を復興させるまで、岩田医師の歩みは止まらない

になった。生涯一医師を貫きたい。現場を走り回るつもりだ」。医師不足に対応する現代の地域医療の最前線で生涯現役を誓う。

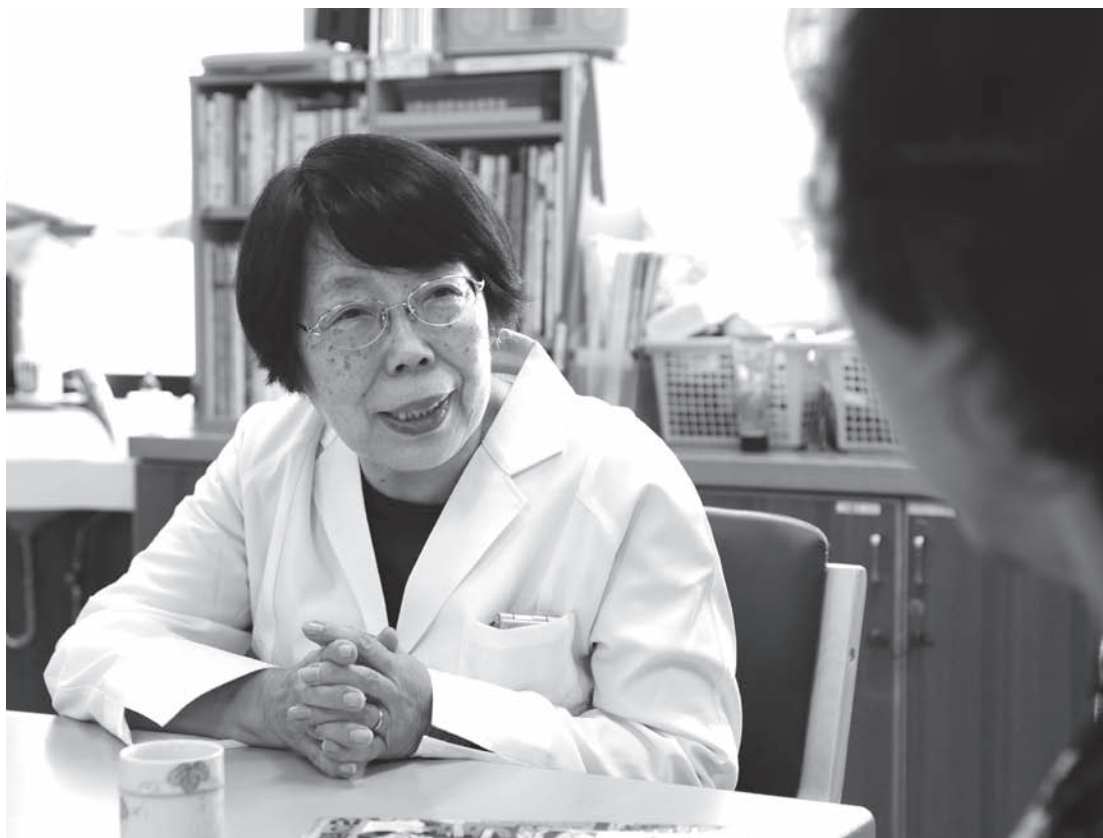
サケは約4年間、海を回遊し、故郷の川に帰ってくるといわれる。今、大槌川を上るサケの多くは震災の直前に放流されたものだ。サケの孵化場は被害を受け、震災直後はほとんど放流できず、その後の放流数も半減していた。これから数年は厳しい状況が続くだろう。それでも故郷を目指すサケは、水の流れに打たれ、どんなに傷ついても力強く上っていく。
(高木克聡)

医療と介護の一体化目指す

西嶋 公子

(東京都)

にしじま・きみこ 西嶋医院院長。昭和20年、富山県生まれ。69歳。
東京医科歯科大医学部卒。国立小児病院、国立療養所神奈川病
院を経て、昭和54年に西嶋医院開設。住民のボランティアグルー
プを結成し、ケアセンターを設立するなど地域医療に尽力している。



(寺河内美奈撮影)



施設のお年寄りたちと談笑のひとつき

神奈川県横浜市と相模原市に挟まれた東京都町田市成瀬台。戸建て住宅が立ち並ぶ閑静な住宅街の中に、「ケアセンター成瀬」はある。デイサービスや特別養護老人ホームが併設された施設は、地域住民が気軽に立ち寄る交流の場でもある。10月初旬、ここで約40人の住民がこれまでの歩みを振り返る集いを開いた。

「今、この地域は超高齢化社会になった。20年前にボランティア組織ができたのは、当時から高齢化の不安を感じていたからだ」

「ボランティアに特別なご褒美はないけれど、一歩踏み出す喜びを覚えた」

思い出話に花を咲かせる参加者に、大きくうなずいて応えるのは西嶋公子医師だ。この地域に根差して35年。「医師の前に一住民」として、住民とともに奔走してきた。

高齢者施設に住民が集まる理由は、この施設ができた経緯にあった。実は施設の建設を求めたのも、運営を担ってきたのも、地域の住民なのだ。

「試行錯誤しながらセンターで開催してきた音

楽会は50回を超えました」とボランティアの女性。「他の施設ではボランティアを集めるのも大変だと聞いているが、ここにはいつも相談できる仲間がいる。私たちは介護保険を使って来ているわけではないが、介護保険の外なる利用者だ」と男性が気を吐くと、会場は笑いに包まれた。

住民の熱気は夜遅くまで途切れることはない。西嶋医師が「何十年も開業医をやらせてもらって、こんな経験ができた。とてもいい時間を過ごしてきた」と締めくくると、大きな拍手が湧いた。

大病院の限界を痛感

医療と介護の連携―。言うのはたやすいが、介護保険制度が始まるずっと前から、それを目指して活動してきた例はあまりない。

西嶋医師の原点は、国立小児病院などで小児白血病の治療に携わってきた経験だ。有効な治療法は少なく、携わった100人の子供のうち98人が死亡する時代。せめて最期の時ぐらい、家族と水



往診先でも笑顔を決やさない



住民とともに地域の未来を考える

(宮川浩和撮影)



地域に根差したクリニック

入らずの時を過ごさせてやりたい。しかし、病院のルールでは親が病棟に泊まり込むのは禁止されていた。大病院でできるケアの限界を感じた。

同じころ実父が認知症となり、入院することになった。その病院では薬の過剰投与や身体拘束が行われていた。ここでも病院のケアに限界を感じるとともに、これは人ごとでなく、これから年を取っていく自分たちの問題だと感じた。

開業した町田市成瀬台は新興住宅地。引っ越してきた住民は当時皆若かったが、いずれ高齢化の波は一気にやってくるだろう。そのときに医療や介護は大丈夫だろうか。「温かい家庭で最期まで自立して過ごしたいというのは多くの人の願いです。では、その願いをかなえるには、どうすればいいかを考え始めたのがスタートでした」

病院の患者やその家族に声かけ、平成元年にボランティアグループ「暖家の会」が設立された。「自分ならどんな介護を受けたいか」「専門性を持たない普通の人に何ができるか」の2点。つまり、介護を受ける側、介護する側双方の視点を持

つことが活動の柱となった。

思いを形にしようと、一軒家を借りて小規模なデイサービスを始めた。利用者が「日本舞踊が好き」と言えば、名取のスタッフが踊りを披露。看護や介護の資格を持たない主婦でも、いつもより多く食事を作り、独居している男性宅に配った。

地域住民へアンケートも行い、約2千人の回答を得た。「近所にケアセンターができれば利用したいか」という質問には9割が「利用したい」、「運営やケアを提供する側としても参加するか」との問いにも6割が「参加したい」と答えた。手応えを感じた。

ケアセンターの設立を市に求めるとともに、資金集めやさまざまなボランティアでの参加を募った。住民の要望に応える形で8年にケアセンター成瀬が開設された。入所者のかけ布団をパッチワークで作ってもらったり、絵や彫刻が得意な人に作品を寄贈してもらったり、プロの演奏家によるコンサートを開いたり…。各自が得意な分野を生かして関わり続けてきた。



医療と介護、双方のスタッフが集まってミーティングを行う

最期まで輝けるように

「先生を一言で表現するなら、大活動家!」

センターでボランティア業務を担当する永尾陽子理事はそう評する。「先生はお医者さんですが、偉ぶらない。同じ住民なんです。住民であることに優劣はないですからね」

そんな大活動家は、常に「現場」に突き動かされてきた。国の介護保険制度が始まったときもそうだ。当時、介護保険を使えたのは65歳以上。どんなに介護を必要としていても、保険料を支払っている40歳～64歳は、パーキンソン病など一部の患者を除いて介護保険を使うことができなかった。

「介護を必要とする末期がん患者が、65歳未満であるだけで介護保険を使えない。64歳のがんと65歳のがんに、どんな違いがあるのか。保険料を納めても、使えずに死んでいけというのか」。厚生労働省への訴えが認められ、18年の制度見直し以降は40歳以上のがん患者も介護保険が使えるようになった。

往診先の患者の娘が言う。「先生にお世話になり始めたころ、『先生に会えて良かった』と言ったら、『それじゃダメ』とおっしゃるんです。どんな医師に当たっても良かったと思えるようにしないとイケない、と」。目の前の患者だけでなく、その向こうにいる多くの人のことを考えているからこそ出てくる言葉だ。

難病を患う高齢女性の往診では、一緒に行った旅先で十和田湖（青森県）の湖面が夕日であかね色に染まったことを懐かしく振り返った。「あれはきれいだった」。女性の病気は進行し、もう旅行は難



常に現場目線だ

しいが、常に患者の気持ちに寄り添っている。

ケアセンターで一番のお気に入り、外壁にあるタイル張りの2枚の絵だという。タイトルは「生命の木」。住民がタイル張りを手伝い、「春」「秋」を迎えた木を描いた。

実りの秋を迎えた生命の木に、はたまた沈む前に美しい輝きを見せる夕日に、人生を重ねる。季節は過ぎ、誰もが終末へと向かう。その最期まで輝けるように。その思いが医師を動かし続けている。

（道丸摩耶）

縁なき地へ自ら飛び込む

鬼頭 秀樹

(徳島県)

きとう・ひでき 徳島県那賀町の町立上那賀病院院長。専門は外科。昭和29年大阪府生まれ。60歳。山口大学医学部卒、大阪市立大学大学院修了。大野病院、和泉市立病院外科部長などを経て、平成18年4月に那賀町立上那賀病院へ移る。平成20年4月から現職。



(飯田英男撮影)

急峻な山々に囲まれた徳島県那賀町で唯一の入院機能を持つ町立上那賀病院の鬼頭秀樹院長は、地域住民の健康の「守り神」ともいべき存在である。

地域医療の世界に飛び込んだのは、平成18年4月。大阪の和泉市立病院の外科部長ポストを辞任する50歳を超えての大英断だった。

患者をどんどん退院させていく病院の方針に「医療は利益を追求するようなものではない」と違和感を抱いていたころ、尊敬する先輩医師が青森の無医村へと転出し、心にぽっかり穴があいた。「人間関係にも悩んでいてね。普通なら開業したりするのもかもしれないが、立派な先輩の影響を受け、僕もどこかあれば行ってみよう、ほんま単純な気持ちだったんです。インターネットで検索していたら、たまたま徳島で募集しているのを見つけたんです」と笑う。

「県内を何か所か見学したが、ここには自治医

大からの先生が義務年限が終わっても10年以上残られていたり、前院長は若い先生だったが、大学の医局から『引き揚げてこい』といわれても、『代わりの先生を送ってこないのなら自分は帰りません』と残っておられたりで」。地域医療に情熱を燃やす姿が気に入った。

「市立病院では、流れ作業のように内科から回ってくる患者を手術して退院させるだけの狭い範囲の病気しか診ておらず、何となくこれでいいかなという思いはあった。僕自身はもう1回医師としてやり直したいという気持ちが強かったんです」

往診から手術までこなす

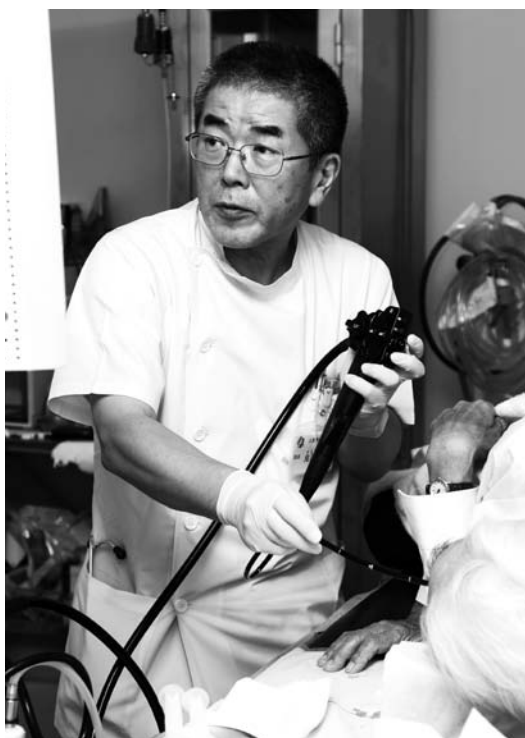
もちろん、縁なき土地への家族との移住に不安が全くなかったといえば嘘になる。「嫁さんはあまり遠くでなければということで、『徳島だったらまあええか』となったんですが、高齢の母親は大阪に残り



往診先では高齢患者との会話を大切にしている



1人1人に時間をかけて説明するのが、鬼頭流。診察だ



病状の見落としがないよう指先に集中する



入念にデータをチェック



地元住民のよりどころである上那賀病院



「利益を考えない医療をしたい」と理想を語る

たかったようでした」

着任してみると、和泉市立病院時代とは勝手に大きく違った。「和泉時代は毎日のように手術をしていた。夜中の2時、3時まで手術後の患者を診たり、夜中に呼び出されたりという生活でしたね。こちらはお年寄りが非常に多く、高血圧、糖尿病、整形疾患がほとんどです。僕は外科やから悪いときは手術せんと治らんとということで、薬を微妙に調節して苦痛をやわらげるといふ治療をしたことがなかった。家に帰って嫁さんに『僕にどうせい言うんや』と言うたこともあったんですよ」

内科治療の猛勉強が始まった。「本を読んだりして細かなことが分かってきたら面白くなってね」。いずれも懐かしい思い出だ。

鬼頭医師が上那賀病院に変化をもたらしたこと

がある。宝の持ち腐れだった手術室に、再び外科魂、を吹き込んだのだ。

最初から順調だったわけではない。麻酔医や手術に対応できる看護師の態勢が整わず、着任して2年間ぐらいは手術患者を大きな病院に送らざるを得なかったのだ。「ここに来たら以前のように手術はできない」ということは頭では理解していたはずだったが、簡単にできる手術まで大病院に委ねることは、外科医として非常につらかった。

「せめて胆石の手術ぐらいはできないか」。そんな思いを強くしていたころ、自治医大から派遣されてきた外科志望の若い医師が、「盲腸とかやりましょう」と協力を申し出てくれた。今では年間60~70件の手術を行う。

徹底して患者に寄り添うのが、鬼頭流、の診察スタイルだ。診察の説明も患者1人1人が納得するまで時

間をかける。患者のためなら労はいとわない。前院長が始めた「日曜診療」を継続し、自らハンドルを握り険しい山道を一日中運転しての往診も続ける。

救急患者をすべて受け入れる方針を貫くのも「病院に来るのは本当に困っているからだ。コンビニに立ち寄るのはとわけが違う」と考えるためだ。住民対象の「健康教室」も始めた。「病気になるまいよう啓蒙していくのも地域医療のうちですから」と語る。

もう1つ、鬼頭医師には確固たる信念がある。入院患者の在院日数を短くする措置をとらないことだ。「昔は『医は仁術』と言ったが、経営とか利益を考えない医療をしたい」との強い思いである。「都会と違ってほかに行く施設がない。家に帰っても家族が少なく介護力もない。病気が治ったからすぐ退院

ではなく、患者1人1人の暮らしまで見据えた医療が必要です」。和泉市立病院時代に抱いた違和感の答えを、懸命に見つけ出そうとしているようだ。

こうした姿勢にスタッフの信頼は厚い。「患者視線で引っ張っていく熱い人」と評する曾根ひとみ看護師長は「自分自身が動かれ、『あと看護師長さんが協力してくれれば手術ができるんですが』などと呼びかけられると、夜中であろうと私たちがやらなければなりません」と語る。

住民が安心に暮らせるよう

どこまでも前向きな姿を患者たちも頼もしく感じている。「こんな山の中に来てくれて。私らは先生を本当に大事にせなあかん」

上那賀病院に来て気付かされたこともある。誰もが地元の病院で治療を受けたいと考えているという当たり前のことだ。「『どうしてもここで手術してほしい』という患者がいたんです。遠くの病院を紹

介しても、高齢者には手術後の通院ができない人もいる。老老介護で家を空けられない人もいる」。遠くに行けない人は、できるだけこの病院で手術をしようと思うようになった。手術患者の「先生を信頼しているから」との一言がたまらなくうれしい。

それは地域医療のあるべき姿を考える契機ともなった。「僻地^{へきち}では総合診療医だけいてもだめ。結局、専門的な治療を受けなければならなくなったら、大きな病院まで1時間半とか2時間かけて行かなければならない。週1回ぐらい専門医に来てもらって、完結できる治療を広げていく。ここでもある程度の治療ができて、どうしてもできないときは大きな病院に紹介する形になれば、若い医師ももっと魅力を感じて来てくれると思うんですよ」と語る。

「僻地^{へきち}とか無医村^{むいむら}があってはならんです。こういうところでも若い人に仕事があって、安心して暮らせるようにせんといかん」。その目は地域医療をはるかに越え、「地方」そのものを見つめている。

(河合雅司)



気さくな人柄は、患者の絶大な信用を集める

心豊かな在宅医療を支えて

二ノ坂 保喜

(福岡県)

にのさか・やすよし 医療法人にのさかクリニック院長。昭和25年、長崎市生まれ。64歳。長崎大医学部卒。長崎大付属病院第一外科、青洲会病院、福西会川浪病院などを経て、平成8年、にのさかクリニックを開設。自身が代表を務める「バングラデシュと手をつなぐ会」などで、海外ボランティア活動にも尽力している。



(奥原慎平撮影)



「人生の最期は住み慣れた自宅で」が二ノ坂医師の持論だ

九州最大のターミナルJR博多駅から南西に8^{キロ}。閑静な住宅街が広がる一角に軽自動車がとまった。「にのさかクリニック」の二ノ坂保喜院長は、軽自動車を降りると、近くの瓦ぶきの民家に急ぐ。在宅患者の容体が急変したと、院長自身の携帯電話に連絡が入ったからだ。

寝室では80代の女性がベッドに横たわっていた。娘は泣きはらし、孫は不安そうな表情で女性の腕をさすっていた。

女性は末期の肺がんを患っていた。突然、たんをのどにからませたのだという。

二ノ坂院長と看護師は、たんを吸引し、聴診器で症状を確認した。二ノ坂院長は娘と30分ほど話し合った後、こう切り出した。

「今の呼吸は『下顎呼吸』といいます。この状態になれば、肺に酸素は入りづらくなる…覚悟はできているよね。長くても今夜いっぱいです」

「本当にいろいろと良くしてもらいました」。娘は母の死の宣告を受け止めた。悲しみにくれなが

ら、病院任せではなく、自宅で母を看取ることができるといふ、満足感にも似た感情が胸中にあった。

女性はそれまで、病院を転々とした。「愛する家族の最期は十分なケアをしてもらいたい」。そんな家族の願いはかなえられず、病院では食事を口にすることはなかった。点滴生活を送った。

その後、自宅療養が決まり、二ノ坂院長が往診するようになった。家のベッドに横たわった女性は、安心したのか、ゼリーなどを食べることもあったという。

娘は「生活環境によって、人は変わるんですね。体調も上向いたし、何より表情も出てきました。この間はイケメンの介護士さんに『お姫様抱っこ』されて、顔を赤らめていたんですよ。どんな形であれ、最期は家で過ごすのが普通なんだと実感しています」と喜んだ。

往診から2日後、女性は亡くなった。「今夜いっぱい」という二ノ坂院長の診断を覆し、1日長く生き抜いた。



患者の誰もが胸中を包み隠さない



疲れも見せずに往診へ



患者の家族写真をスライドに映して、内勤スタッフとも情報をすり合わせる



にのさかクリニック

200人の患者を往診

二ノ坂院長は平成8年3月、在宅医療の拠点として「にのさかクリニック」(福岡市早良区)を開業した。医師や看護師、ソーシャルワーカー、ケアマネジャーら現在、十数人のスタッフが、周辺地域200人の在宅医療を支えている。

連日、午前中に外来患者を診察し、午後は周辺を車で駆け巡る。在宅患者の往診だけでなく、障害者通所施設にも訪れ、重度のダウン症患者らも往診する。毎週水曜日は、午前も午後も往診にあてる。それぞれの医師は、10軒ほどを訪問し、患者を診療するという。

なぜ、外来ではなく往診に力を注ぐのか。

二ノ坂院長は「人生の最期は住み慣れた家で、豊かな生活の中で迎えるべきなんです」と強調する。

二ノ坂院長は、昭和52年に長崎大医学部を卒業し、長崎大病院や大阪府立病院などで救急医療や外科のキャリアを積んだ。

特に高齢患者を診る中で、「家族に見守られる自宅と、知り合いのいない病院の中で苦痛に耐えるのは、どちらが症状の緩和に役立つだろうか」と疑問が浮かんだ。

トントンと台所から聞こえる包丁の音、廊下を走り回る孫の楽しげな声。何げない日常の喧噪が、患者の生活に潤いを与えているのではないだろうか。

ただ、自宅にいればよいという話ではない。病院のようにコールボタンを押したら、看護師が駆けつけてくれるわけではない。クリニックには、症状を緩和する医療技術と共に、患者と時間を共にする家族の不安を和らげることも求められる。だからこそ、往診に長い時間を割くのだ。



スタッフ同士のミーティングは毎朝おこなう

最期の看取りは戦い

200人近くの在宅患者とその家族を、6、7人の医師だけで支えることはできない。二ノ坂院長以外の医師は非常勤で、深夜や土日の対応は院長のみとなる。

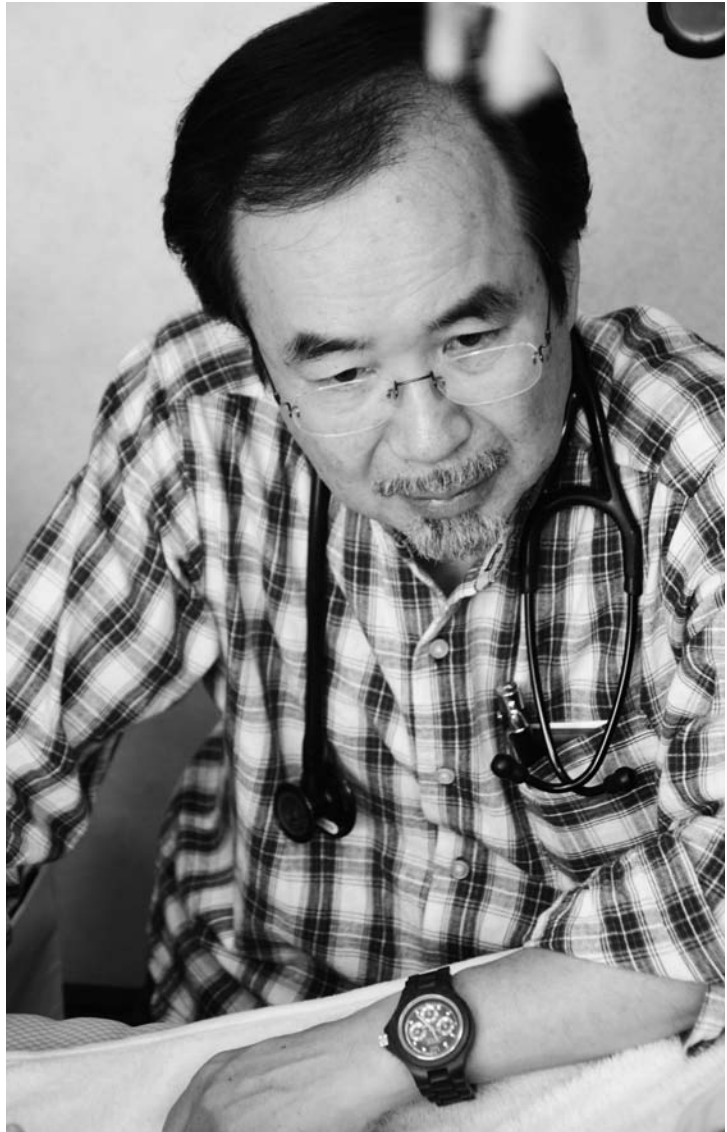
「人生の最期は自宅で」という持論を実現するには、社会全体のサポートが欠かせない。医師や看護師の緩和ケアが、在宅の医療の土台だとしたら、ケアマネジャーやヘルパーによる生活支援が、土台の上の建物となる。

二ノ坂院長は、在宅医療への理解を深めるため、さまざまな手立てを講じてきた。

平成19年、訪問看護師らに呼びかけ、地域の往診医や24時間対応の訪問看護ステーションなどの情報をまとめた『ふくおか在宅ホスピスガイドブック』を作成した。患者にとって有益な情報といえる。また、健康や病気に関する講話など健康教室を毎週開く。クリニック開院当初より発行している広報誌『ひまわり』の発行は220回を超えた。

在宅患者が豊かな生活を送るためにボランティアの活動が不可欠だと感じれば、養成講座を開いた。

これまでに40人以上が講座を卒業し、ボランティアとなった。和菓子作りや手紙の代筆など趣味を生かした活動でもかまわない。音楽や写真撮影など職業経験を生かしたボランティアもいる。二ノ坂院長は「自身がたずさわった仕事に応用できるんですよ」という。



患者を見つめるまなざしは常に真剣

ボランティアの半数は、父や母の最期を自宅で看取った人が占めるという。

「24時間家族を介護する在宅での看取りは、戦いのようなもの。大変な苦労はあっても、やり遂げたときのやりがいは大きい。それだけに、自分自身の経験を、別の戦友に伝えて、有効に使ってもらいたいと考える人が多いんです」。こう語る二ノ坂院長は、今日も往診に出かける。（奥原慎平）

離島の医師として25年

古川 誠二

(鹿児島県)

こかわ・せいじ パナウル診療所所長。昭和24年、徳島県生まれ。65歳。久留米大学医学部卒。徳島大学医学部付属病院、徳之島徳洲会病院、与論町立診療所などをへて、平成3年にパナウル診療所開設。若いころから離島医療を志し、総合的な能力を持つプライマリ・ケア医として、地域住民に寄り添っている。



(甘利慈撮影)

鹿児島空港から、飛行機に乗って約1時間20分。鹿児島県最南端にある与論島は、人口約5400人の隆起サンゴ礁の有人離島だ。気候は年中暖かい亜熱帯。自治体名でいうと、鹿児島県与論町になる。島内を車で回ると、どこまでも続く鮮やかな緑色のサトウキビ畑と、紺碧こんぺきの海が印象的な、美しい島だ。だが、ひとたび台風が直撃すると飛行機も船も近寄れずに孤立し、生活用品やガソリンは届かなくなる。島民は、厳しい自然環境の中で生きている。

ここで「パナウル診療所」の所長を務め、あらゆる疾患に対応できる「プライマリ・ケア(初期診療)医」として、25年以上、地域医療に寄り添い続けてきたのが、古川誠二医師だ。

「与論島の古語で、『パナ』は『花』、『ウル』は『サンゴ』をさします」。診療所の建物は自ら図面を描き、「木のぬくもりが好き」なことから、温かみを感じさせる木造にした。建坪は100坪(約330平方坪)に達する。待合室にいくつもある本棚には、

たくさんの本を並べ、患者が自由に借りて帰れるようになっていた。まるで、ぶらりと立ち寄ってくつろげるサロンのような趣だ。

風邪から骨折の患者まで

プライマリ・ケア医とは、離島や僻地へきちなどで、大勢の住民に対して、内科や外科、耳鼻科、皮膚科など、あらゆる診療を行う、総合的な能力や知識を持つ医師のこと。古川医師は毎日、午前と夕方に約50人を診療し、真夜中に電話でたたき起こされることもある。

診療所に持ち込まれる病気やケガは、「風邪をひいた」「目が痛い」「骨折した」などさまざま。「『釣り針が刺さった』『サトウキビ刈りで手を切った』なんて、与論島ならではのでしょう」。今年の夏は映画の撮影に来ていた関係者が、強い日差しでやけどを負って皮膚が水ぶくれになり、治療に来たという。



毎朝、来院者の検査にのぞむ



往診や訪問診療に出かけた家では、丁寧な対応を心がける



与論島民の実直さが好きという



ネットなどを利用した勉強も欠かさない



「パナ」は花、「ウル」はサンゴの意味



医師不足の地域で働きたいという思いは、若いころから

診療の合間には訪問診療や往診も精力的にこなし、島に多い「ご長寿」の住民の話に耳を傾ける。定期的に自宅を訪れている竹恵美子さん（105）は「おかげさまで、先生は心の支えにもなっています」。古川医師は「とにかく、何でも丁寧な話を聞くことを心がけていますよ」と笑顔を見せる。

さらに重視しているのが治療や救急搬送の優先順位を決めるトリアージだ。大きな病気にかかった患者の場合、島外の大病院へへりで搬送する必要があるが、判断が遅れれば、「取り返しがつかなくなる」。

町田末吉さん（76）も今年6月、脊髄を取り囲む

硬膜の外側に膿がたまる病気「硬膜外膿瘍^{のうよう}」にかかり、自宅で倒れた。

病状の重大さにすぐ気付いた古川医師は、沖縄県の病院に町田さんをドクターヘリで運ぶよう指示。町田さんは、幸い手遅れにならず手厚い治療を受けることができ一命を取り留めた。

「せつかく先生に命をいただいたんです。何とか恩返ししたいのですが…」。こう語る町田さんのように、古川医師へ最大限の感謝の言葉を口にする島民は後を絶たない。

出身は徳島県。医師を志したのは、9歳のとき2つ下の妹をジフテリアで亡くし、その後、両親が泣き暮らしていたのを目の当たりにしたことが大きい。人の命を救い、人の悲しみを少しでも和らげる仕事につきたいと思った。

「入院していた妹が元気になり、明日退院して帰宅することができる、というまさにその日に、突然亡くなりました。両親の悲嘆ぶりは、とても大きかった。ひな人形を捨てることのできるまでに、1年もかかりました」

医師を志すにあたり、「医師不足の地域で働きたい」という思いを抱いた。そして大学を卒業して民間病院に勤め、いろいろな医師の話を聞くうちに、「特に隔離されて常勤の医師がいないような、離島の医療に貢献したいという思いが強くなった」という。

その後、実際に離島で先輩の指導を受けたり、米国家庭医の専門医から学んだりして研鑽を積んだ。指導を受けた中には、漫画「Dr.コトー診療所」のモデルとなった、鹿児島県の下甕島^{しもこしきじま}（現薩摩川内市）の瀬戸上健二郎医師がいた。

昭和60年には、徳之島の民間病院院長として離島医療の実践をスタート。63年、医師不足に悩む与論島の求めに応じて与論町立診療所に赴任した。さまざまな事情でこの診療所が閉鎖された後も、「地域住民と寄り添い続けたい」との思いからパナウル診療所を開き、島に残った。

一つの場所に腰すえたい

「本当に地域に溶け込んだ医療を実践するには、ひとつの場所で長期間やらなければなりません」

さらに古川医師は医療以外の活動でも、全ての生活で住民と向き合う。例えば、定期的に公民館の一室で、住民を対象に英会話教室を開催。印刷物を用意し、インターネットの動画サイトで流れている番組を使う。

このほか、ギターバンドを編成して介護施設で演奏したり、診療所でミュージシャンを招いてコン

サートを開いたり、体操教室を主宰したり…。事務長を務める息子の哲平さん(28)は「一言でいえば『活動家』。いろいろな本を読んで、アイデアを思いついているようです」。古川医師は「実直でピュアな『島んちゅ』(島人)の笑顔が、モチベーションなんですよ」と笑う。

後進教育にも熱心で、今も鹿児島大医学部の臨床教授として、学生の実習や卒後研修も年50人ほど受け入れている。頼もしく感じているのは、「『Dr・コトー』などの影響もあるのか、今の若者は地域医療への意識が高く、とても真面目に取り組んでくれることです」という。

「今はインターネットなどが発達し、世界中の最先端の情報を手に入れることができる。僕も、実習や研修で受け入れた若い医師たちと一緒に勉強しています」。四方を海に囲まれた与論から、常に世界を見つめている—。そんなスケールの大きさを感じさせる「赤ひげ先生」だ。(山口暢彦)



離島医療にたずさわりながらも、国際的な視野は常に失わない



日本医師会常任理事
石川 広己

第3回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考につきましては、6月19日に日本医師会より都道府県医師会宛て推薦依頼文書をお送りし、21の医師会からご推薦をいただきました。

選考に当たりましては、外部の審査員、産経新聞社、それに日本医師会役員が加わった11名で審査を行い、その結果を基に、8月28日には日本医師会館で選考会を開催させていただきました。

その後、10月22日には、今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。本日受賞されました皆様には心よりお祝いを申し上げるとともに、ご推薦していただきました都道府県医師会、更には、特別協賛いただきましたジャパンワクチン株式会社、ご後援いただいた厚生労働省など、本賞にご支援賜りました多数の方々へ感謝を申し上げます。

赤ひげ大賞では、選考対象として、日常の診療に加えて、「予防医療活動・学校保健活動・公衆衛生活動等を通じた地域住民の健康管理」「医療環境整備や社会活動」「障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動」といった取り組みに尽力し、医療を通じてまちづくりの一翼を担っている医師。また、医師不足・医師偏在等、医療資源の乏しい地域や、インフラ整備が進んでいない地域など、地方あるいは都市ならではの問題を抱えた厳しい医療環境の中で住民を支えている医師、等を掲げておりましたが、各都道府県医師会よりご推薦をいただきました21名の先生方はすべて、本賞に値する素晴らしい活動を地域で続けてこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いました。

そのような中、特に選考委員の目を引きましたのが、今回受賞されました5名の先生方でありました。

岩手県の岩田千尋(いわた・ちひろ)先生は、医師不足が恒常的な中、38年間の長きにわたり近隣住民の健康管理に貢献されるとともに、東日本大震災後、町民の笑顔を取り戻すべく、定年退職を延長して勤務を続け、全力で医業に取り組んでいらっしゃいます。

東京都の西嶋公子(にしじま・きみこ)先生は、地域のコミュニティーが未熟な新興住宅地において、住民による互助の仕組みを立ち上げるなど、現在の地域ケアモデルとも言うべき取り組みの先駆者でいらっしゃいます。

徳島県の鬼頭秀樹(きとう・ひでき)先生は、地域医療に貢献したいという思いで移住され、病院内で完結できる診療範囲の拡大や、24時間年中無休で対応する等、常に、町民の健康のため最善を尽くしておられます。

福岡県の二ノ坂保喜(にのさか・やすよし)先生は、人生の最期は豊かな生活の中で迎えるべきであるとして、在宅ホスピスボランティアの養成や住民への医療・在宅ホスピスに関する知識の普及・啓発等、地域に根付いた医療活動を続けていらっしゃいます。

鹿児島県の古川誠二(こかわ・せいじ)先生は、在宅死が7割を超える離島で専門医がいない中、プライマリ・ケアの実践を行い、25年間離島医療に従事されている他、島しょ地域の医療向上を図るための人材育成にも、積極的に取り組んでおられます。

5人の方に共通しているのは、病気だけを診るのではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ているということであり、まさに医療はまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生の心意気に大変感動いたしました。

高齢社会を迎え、往診、在宅医療、看取りなど現場の先生方のご苦労は絶えないこととお察しますが、日本の医療を支えていらっしゃるの、今回受賞された先生方をはじめとした地域医療に従事する先生方なのです。

本赤ひげ大賞が、そのような先生方の励みとなり、第3、第4の赤ひげ先生がそれぞれの地域で地域医療の充実にご尽力いただけることを願っております。ありがとうございました。

第4回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

- 主催** 日本医師会、産経新聞社
- 後援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 特別協賛** ジャパンワクチン株式会社
- 対象者** 日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師。
ただし、現職の都道府県医師会役員は除く。原則として、70歳未満の方を優先。
- 推薦方法** 各都道府県医師会会長が1名を推薦
- 推薦基準**
- 日常の診療に加えて、「予防医療活動・学校保健活動・公衆衛生活動等を通じた地域住民の健康管理」「医療環境整備や社会活動」「障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動」といった取り組みに尽力し、医療を通じてまちづくりの一翼を担っている医師。
 - その他、医師不足・医師偏在等、医療資源の乏しい地域や、インフラ整備が進んでいない地域など、地方あるいは都市ならではの問題を抱えた厳しい医療環境の中で住民を支えている医師。
- 受賞発表** 産経新聞紙上
- 選考** 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
- 副賞と賞金** 賞状、記念盾および副賞100万円

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、
これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、
ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、
この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、
力強く歩み続けていきます。



ジャパンワクチン株式会社

japanvaccine.co.jp